

# こちら特



「バカでないか。頭の  
おかしくなった連中だ」  
一九七四年、有機農業  
を始めた山形県高島町の  
星寛治も若手農家を  
周囲はあざ笑った。  
高度経済成長の真っ盛  
れ除草剤や化学肥料の  
導入で、コメや野菜の収  
穫はぐんと増えていた。  
昔ながらの農法への回帰  
を志向する星らは、農村  
にもたらされた「繁栄」  
に背を向ける変わり者で  
しかなかった。  
星たちは父親をどうに  
か説得し、農地の一部を  
有機農業用に回してもら  
った。堆肥を作り、四つ  
んばいになって草むしり  
。ドロオイムシが大量  
発生してはつきりで追っ  
た。  
一年目の収穫は周囲の  
六割程度でしかなかっ  
た。十倍にもかかった苦  
労を思うと、がっかりも  
したが、収穫したべっ甲  
色に輝く米粒は素晴らしい  
出来で喜びもあった。

二年目やはり収穫は  
六割だった。三年目は堆  
肥を増やすなどの工夫を  
凝らしたが、冷夏に襲わ  
れた。村の田んぼのほと  
んどが白茶けた色に覆わ  
れ収穫は絶望的と思われ  
た。八月下旬、星らの田  
んぼは黄金色に変わり始  
めた。周囲の収穫は例年  
の半分以下に落ち込む  
中、前年の一・五倍の収  
穫を得た。周囲は「奇跡  
が起こったのか」と不思議  
がり、星も驚いた。  
後に大学教授から「微  
生物の力」と教わった。  
農薬や化学肥料を使わな  
い田んぼには一握りの土  
に十数億もの生き物が生  
息しているという。星ら  
の田んぼの温度は、周囲  
と比べ三度ほど高く、冷  
害に耐えた。  
星が就農したのは五四  
年。大学の文学部に進学  
したかったが、農家の五  
人兄弟の長男で、「家族  
を守らないと」とごう責  
任感から断念した。

## 有機農業家・詩人 星寛治さん(77)

ほし・かんじ 1935年、山形県高島町  
生まれ。73年に高島町有機農業研究会を  
若手農家と一緒に創設し、翌年から有機  
農業を始める。75年に町教育委員に就任  
し、83～99年は委員長。元東京農大客員  
教授。著書に「有機農業の力」「農から  
明日を読む」、詩集「滅びない土」など。

# 農薬、化学肥料と決別



有機農業の農家と産地直送販売の提携をする消費者の見学会＝昨年9月、山形県高島町で

この年、父親が出始め  
たばかりの耕運機を購入  
してくれた。農作業は以  
前よりもずっと楽になっ  
た。コメと養蚕、二頭の  
乳牛を飼う小規模農家か  
ら、扱いをリンゴとブド  
ウに広げて収入増を目指  
した。

### デスクノメ

米国の科学者レイチェ  
ル・カーソン氏が六二年  
に著書「沈黙の春」で化  
学物質による環境汚染を  
告発していた。「このま  
までいいのか」と疑問を  
覚えつつも、農薬と化学  
肥料を使い続けた。  
七一年、十年間、手塩  
にかけて育てたリンゴが  
全滅した。化学肥料をや  
りすぎたことが木に負担  
をかけたようだった。疑  
問は確信に変わった。  
仲間と各地を視察し、  
日本有機農業研究会の一  
員として出会った。  
「このままでは農家は駄  
目になる。自給という原  
点を取り戻すべきだ」と  
論じ、有機農業に取り  
組むことを決意した。

農業基本法の制定は六  
一年。政府は、経営規模  
拡大や機械化を奨励し、  
農家の所得を他の産業と  
同程度に引き上げること  
を目指していた。

高島町は「まほろほ  
の里」と呼ばれてい  
る。山々に囲まれ、実  
り豊かで住みやすい所  
という意味だそうだが、  
縄文草創期の洞窟遺跡  
もあり、一万二千年前  
から人が住んでいた。  
古来、豊かな土地だっ  
たのだ。有機農業は、  
もともとある大地の力  
を生かすことでもあ  
る。雪深い山里に、そ  
れはある。(国)



「このころの星の頭の中  
に、有機農業の考えはま  
ったくない。「むしろ、  
近代農業の先兵になるつ  
もりでした。国策に沿っ  
て収穫を増やそうと必死  
でした」  
噴霧器を背負って田ん  
ぼに農薬をまいた。頭痛  
や吐き気をもよおした。  
「虚弱体質だからか」と  
思ったが、子どもも高齢  
者が同じように苦しん  
でいた。農薬と化学肥料  
で育てた牧草を食べてい  
た牛が病気になる、コイ  
が死んだ。

## ふれあいと感動の旅

「ユース」の追跡

# ちろ特報部

# 大地の穰め 幸せ 踏みしる 生きる

有機農業を続けて十年ぐらひは、くじけそうになる自分自身、変わり者とあざける地域、近代化を推し進める国の農政との「三つの戦い」だった。



「一見、気の遠くなるような単調な作業ですが、苦役だとは思いませんでした。歳月をかけて培った豊穰の大地は、カネに代えられない宝物。命の母胎なのです」

有機農業でつくったコメや野菜、果物は甘くておいしい。「何よりも体を奪い尽くした」。福島



県からは一万人以上の人え方と思われました。安が山形県に避難した。星全神話があったから、異たちの農作物も風評被害端者として見られた」にさらされた。

八六年のチェルノブイリ事故後、星には「脱原発」の思いはあった。有機農業の集会や講演などで話題が原発に及ぶと、反対を訴えたが、反応は芳しくなかった。「科学文明を否定する遅れた考

## 脱原発 必要なのは「脱成長」



自宅に隣接する倉庫で収穫したリンゴを手にする妻のキヨさん

にエネルギーを確保したくないと豊かになれる、とはならないでしょうか。賛同する若者も出始め、新しいライフスタイルで快適な生活に慣れ、たことが縁で、八九年以降、物質的欲望を抑えるのは、大学生が高島町に農業研究に来るようになった。有機農業にほれ込め、研修後、八十人近く「脱原発」には「脱成長」が必要だと説く。高校一年生の星の孫「再生エネルギーへの転換でも、将来は有機農業で、何も変わらなを」と言い始めた。後、多少の不便、機械に中、有機農業の仲間うち

足跡など消えてもいいよ。人は業績を残し、周りから評価されたがるが、永遠の存在はない。足跡を残すことより、一歩一歩、大地を踏みしめる充実感を得ることが幸せだという意味を込めた。「小さな地球でいがみあひ、最近は無人数をめぐって国家が情けない抗争をしている。何億年の宇宙の歴史の中では、けし粒にもならない」(敬称略、小坂井文彦)